



Title	2016年の賀友直 : 逝去の報に接して
Author(s)	加部, 勇一郎
Citation	連環画研究, 6, 2-11
Issue Date	2017-02-28
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.98444
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98444
Type	departmental bulletin paper
File Information	renkanga_6_2-11.pdf

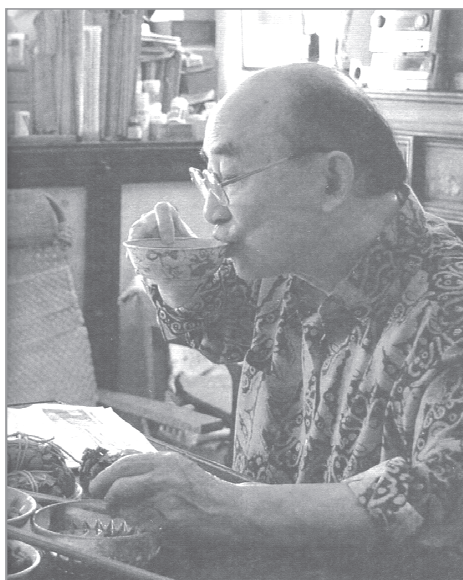


2016年の賀友直 — 逝去の報に接して

加部 勇一郎

連環画を知らない人に、「オススメは？」と聞かれたら、まず賀友直の名を挙げるだろう。彼の描線の丁寧さは、眺める者を飽きさせない。構図の大胆さもまた、多くのことを語りかける。何よりたまらないのは、どの作品にも、彼の対象への細やかな愛情が感じられることだ。暖かな眼差しにより息吹を与えられた人物たちは、その絵に触れた者にほほえみかける。素朴なユーモアに出会ったりすると、得をした気分になる。

彼は1922年に上海に生まれる。幼少の頃は寧波に暮らしていたが、15の時に上海に出て工場の徒弟となる。教師や兵士などの職を転々とした後、上海で結婚し子どもを設ける。連環画を描き始めるのは、1949年の9月というから、新中国の成立前夜のことだ。新中国に入ってから、本格的にその道に進むことになり、以降、ずっと第一線を走り続けてきた。連環画の大きな賞も取っていて、代表作を挙げれば、『山郷巨変』『小二黒結婚』『李双双』『朝陽溝』など、じつにきりがない。1966年以降は、不遇な時期もあったようだが、文革が終わって1980年に入ると、大学で教鞭をとったり、海外へ作品を見せに行ったりと、押しも押されぬ存在となる。連環画についての理論的な著述も残しているから、彼じしんが連環画なるものの、その深い部分に関係している人物とも言える。



賀友直



『小二黒結婚』より

1980年代といえば、連環画は、テレビの家庭への普及や海外のマンガの流入などの影響で、徐々に時代遅れのものとなっていくわけなのだが、彼はそんな中であって、いわゆる連環画とは少し違う形を摸索しながら、精力的に仕事を続けていく。本の表紙や挿絵もたくさん描いている。21世紀に入った晩年オールドの仕事には、民国期上海を扱うものが多く、昔の職業を描いた『賀友直画三百六十行』(2004)や、街と人々を描いた『走街穿巷憶旧時』



『賀友直画三百六十行』より「小書攤」(貸し連環画屋)

(2013)などの作品集が出版されている。

筆者が賀友直をきちんと追うようになったのは、ここ五年くらいのことだ。一昨年くらいだったか、ネットでインタビューを受けている90歳近い彼の姿を見かけて、そのかくしゃくとしたごようすから、いつまでもお元気だなあとうれしい気持ちになったものだったが、2016年3月、突然、彼の訃報に接した。ただのファンとして次の作品を楽しみにしていた、そんな矢先のことだった。

彼が亡くなったのは3月の16日のこと。翌17日の『文匯報』の記事によれば、直前まで普通に暮らしていて、その日の朝も自らうどんをゆでたのだという。彼はその日、寧波からの客と会う約束があった。寧波には彼の原籍があり、そこの美術館で作品展示をすることになっていたのだった。打ち合わせを終えて、客人が帰ると、彼は妻に、次に寧波へ行くときには高速鉄道に乗るぞと、野望を語った。まだ乗ったことがなかったからだ。しかし、ほどなくしてトイレへ入ったところで、おかしくなった。急いで病院に運ばれ、夕方には、いっとき回復の兆しも見せるが、晩の7時に幾度も血を吐くに到り、30分ころ、この世を去った。病院側の説明によれば、突発的に消化器系で出血したことが原因という。

ただ実のところ、彼の死を知ったときも、ショックには違いなかったが、「そうかあ」くらいの感情しか湧かなかった。筆者にとって、賀友直は手の届くはずもない、雲の上の存在だったし、同じ世界に暮らしている感覚も薄かったから、そもそも騒ぐ

ほどのリアリティがなかったわけなのだ。だが、その年の8月に上海へ行くことが決まり、上海で彼の回顧展が開かれていること、そして彼の故郷の寧波に「賀友直芸術館」なる施設があることを知ると、今年の内にめぐらねばならないような気持ちになった。そして、これは逆説的なことだが、賀友直の不在を確かめるべく動いたことで、徐々に筆者の中に、彼についての輪郭が、より鮮明に立ち現れて来たのである。

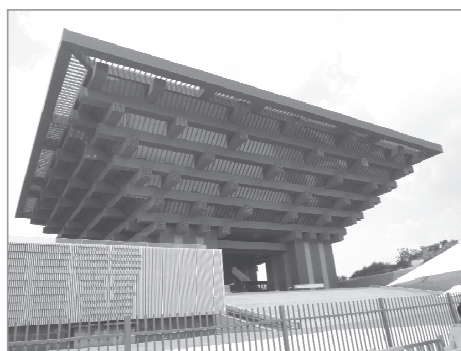
以下は2016年夏の、賀友直にゆかりの場所をめぐった筆者の、極めて私的な記録である。このささやかな私記により、賀友直という人物と、彼がその生涯に取り組んだ画業について、皆さまに少しでもお伝えできれば幸いである。

上海・中華芸術宮（8.25）

まずは上海の中華芸術宮で開かれていた彼の回顧展について述べることにしよう。

上海の中華芸術宮は、2010年に開かれた上海万国博覧会の跡地にある美術館だ。万

博の後、中国館だった建物に、もと南京路にあった上海美術館が入った

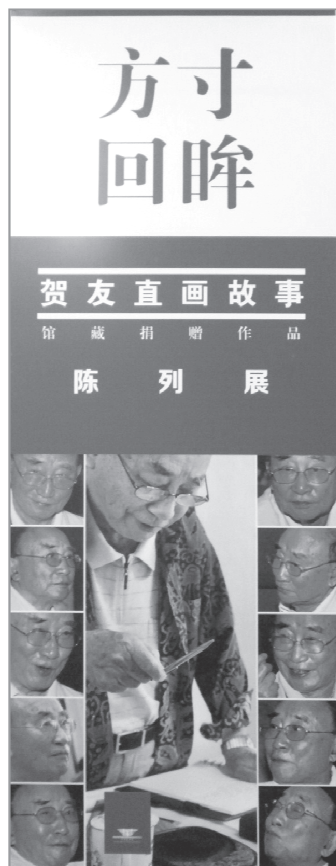


上海・中華芸術宮

博の、のだという。最寄り駅「中華芸術宮」が地下鉄8号線に接続していて、交通の便はとてもいい。鮮やかな赤に奇抜な概観が、上海の新名所と呼ぶにふさわしい。

巨大な空間には、国画や洋画や彫刻など、さまざまなジャンルの美術が、山のように展示されている。若手の挑戦的な作品も多く、疲れはするが、退屈はしない。万博の際の目玉となった「動く清明上河図」を、ここでは今もなお、見ることができる。何より素晴らしいのは、そういった“芸術”の周縁に位置する連環画やアニメについても、しっかり解説の場所が与えられていることだ。連環画のエリアには、張樂平『三毛従軍記』や賀友直『山郷巨変』が展示されていた。

賀友直の回顧展は、中華芸術宮の出口に近い辺りで、ひっそりと開かれていた。正式なタイトルは「方寸回眸——賀友直画故事・館蔵捐贈作品陳列展」という。上海美術館に寄贈された彼の作品を展示しているらしい。



回顧展ポスター

会場はやや薄暗く、強めのライトが「見るべき部分」に直接当てられていた。そこには、彼の連環画作品の原画や、生前の彼の姿に迫ような写真が、細々と並べられていた。過去の版本を見せるガラスケースもいくつかあった。

上海美術館が蔵する作品の一部は、『上海美術館館蔵賀友直連環画作品集』（上海人民美術出版社、2015）

の名で書籍化がされ、連環画を英訳付きで見ることができる。ここでは回顧展で展示されていた、そこに収められていない二作品について、簡単に記しておくことにしよう。二作品とは、『胖嫂回娘家』（デブおばさん、実家に帰る）と、『市民的大世界』（市民の大世界）である。

『胖嫂回娘家』は 1956 年の同名アニメをもとに、80 年代に入ってから作られた連環画である。太ったおかみさんが、実家の母親が倒れたという知らせを受け、慌てて里帰りをする物語。おかみさんはあまりに慌てたものだから、子どもの代わりに枕を抱きかかえて家を出てしまう。途中、冬瓜の畑でスッ転んで、夜の暗闇の中、今度は冬瓜と取り違えてしまう。実家に着いたら、母親は元気で、ホッとつかの間、見れば子どもは冬瓜に変わっていて、びっくり仰天、といったおはなし。もともと民間で語られていたものだが、賀友直は親思いの娘のドタバタを、ユーモアたっぷりに描き出す。鮮やかに彩色が施され、ときおりアニメを意識したようなカットも挿し挟まれていて、眺める者をじつに飽きさせない。

『市民的大世界』は今から百年前の、1917 年に上海で開業した娯楽施設「大世界」を描いた一枚絵だ。作品の正確な成立年代は、汪観清（1931-）が共作者として名を連ねているあたり、最晩年のものだろう。1.5 メートル四方はあろうかという、巨大な作品である。

中央には「大世界」の建物本体がデンと据えられ、その周囲に、内部で供されていた娯楽の数々、たとえば馬戲や^{サーカス}哈哈鏡、^{マジック・ミラー}西洋鏡などが、歓声を上げる山のような人々とともに描かれている。さらにその隙間には、入り組んだ階段と手すり、それ



写真や版本の展示



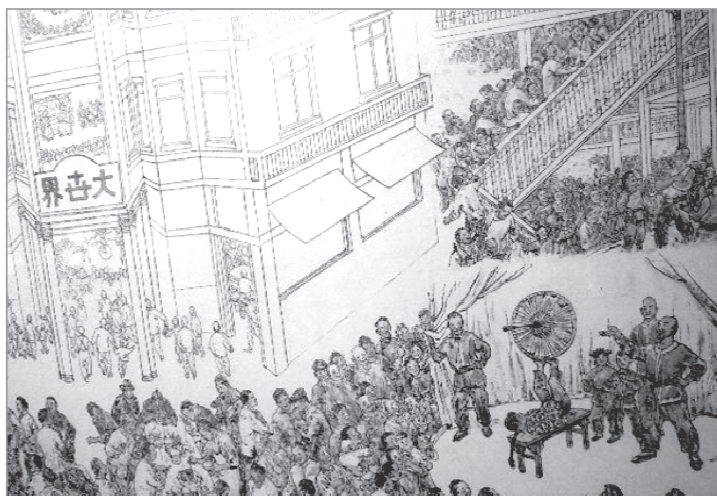
『胖嫂回娘家』より、冬瓜に驚く母親

らに沿って我先にと移動する、すさまじい数の人々が描きこまれている。それはまるで、大世界という建物を流れる血液のようで、彼らの熱狂ぶりが、在りし日の鼓動を伝えている。

中央の建物が硬質で白っぽく、空虚な印象を与えるのに対し、周囲が躍動感あふれる、黒々とした人物で埋め尽くさ

れるといった構成が、かつて人々を魅了した「大世界」なる“場”をいっそう神秘的に見せ、薄暗い中に白く浮かび上がるさまは、崇高ですらあった。

会場には、客はまばらだった。加えて、警備員と強めの冷房とが、ひんやりとした空間を作りだしていた。その静けさこそが、偉大な絵師を悼むにふさわしいものなのだろう。しかし「大世界」をこのように描いた賀友直ならば、にぎやかな中で回顧されることも、それほど嫌がらなかったかも知れないと、そうも思った。



『市民的大世界』（部分）

寧波・賀友直芸術館／賀友直記念館（8.29）

次に行ったのは、寧波にある賀友直の^{ミュージアム}芸術館である。寧波は彼の原籍のある土地で、上海に住むようになってからも、たびたび訪れていたらしい。

芸術館の最寄り駅は地下鉄「中河路」駅で、そこからは車で5分ほどだ。寧波で賀友直のことを知っている人には、ほとんど出会わなかったが、ネットで調べた情報を頼りに、なんとかたどり着くことができた。

建物正面には「賀友直芸術館」と「賀友直記念館」の二種の標示がある。この施設の管理人で、賀友直の親戚にあたる賀恵忠氏によれば、二つの標示は、どちらも正しいもので、もともとは芸術館と言い、賀友直の死後に記念館の名が加わったのだという。いま2017年3月のリニューアルに向けて改装を計画中とのことで、それ以降は記念館になるのだ



賀友直芸術館／記念館・正面

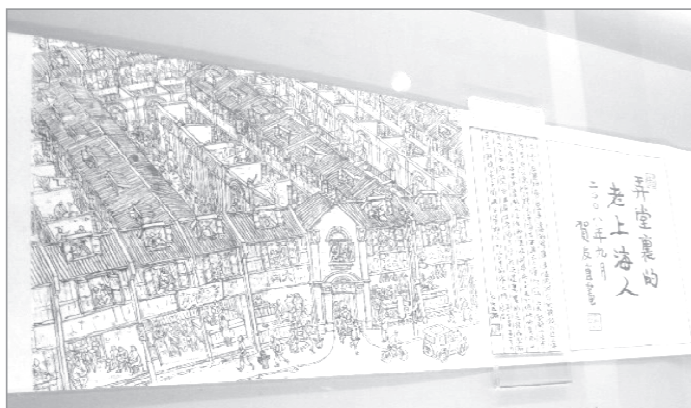
とか。この日は月曜だったから、本来は休館日だったようなのだが、遠方からの客とわかると、賀氏は嫌な顔一つせず、参観を許してくれた。

建物は立派な三階建てで、ごく最近の作りらしい。このとき許された参観は、二階のみで、そこには展示室と工作室とがあった。展示には大小二つの部屋があてられ、大きな部屋には『小二黒結婚』『白光』『山郷巨変』など、彼の代表作が一枚一枚、額に入って飾られていた。先日の回顧展と重なる作品も見られたが、賀氏によれば、原画は上海美術館のほうにあるのだという。



作品の展示

中央には長いガラスケースが置かれ、そこには『弄堂里的老上海人』(2010)があり、色のついたほうの一枚が飾られていた。これは、上海の古い街並みを、そこに暮らす人々の生活とともに描いた、大変に見応えのある作品である。



『弄堂里的老上海人』(部分)

小さな部屋では、細々とした一枚絵の作品や、連環画の実物や、賞状や証書の類を見ることができた。中に一枚、巨大なブッダの絵が飾られていて、上海を描くことの多い彼にしては珍しい作品と言えるが、これは2000年頃に、シンガポールの双林寺のために描いた「双林示寂」という。中央にブッダが、



「双林示寂」

周囲に民衆が描かれたもので、大きな何かに引きつけられる小さなもの、といった観点で見ると、上に記した『市民的大世界』に通じる作品と言えるかもしれない。その他、賀友直が上海の街で目睹したさまざまを一枚絵で描いた連作『城市边角』(2011

頃)もあった。携帯を耳に当てる群衆を描いたもの、道ばたで儲け話を持ちかける男を描いたもの、子どもを幼稚園に迎えに来る大人たちを描いたもの。いずれも「あるある」とうなづけるものばかりで、その重なりがうれしい。

三階は居室になっていて、ここは非公開とのこと。賀友直は年に二回、清明と冬至のあたりに、墓参りのために帰郷していたのだそうで、工作室や居室はその時に実際に使われていたものという。ここの展示は総じて、中華芸術宮のものに比べて踏み込んだものが多く、賀友直により近づいている気分が味わえた。

最後に、一階の事務室に通され、訪問を記念する署名をした。賀氏によれば、過去に華僑の訪問はあったが、外国人は初めてとのこと。ここに賀友直の画集を置いているかと尋ねると、本なら上海の方が買えると言われ、ディエンツファン田子坊のショップ(次節)に行くことを勧められた。



工作室

別れ際、賀氏から来訪の記念にと、『賀友直画自己』(上海書店出版社、1996)をいただいた。すでに持っている本であったが、書店ではもう見かけないものだし、予想外のことだったので、本当にうれしかった。荷物をまとめ、リニューアルを楽しみにしていることを告げると、芸術館を後にした。

上海・田子坊の賀友直ショップ(8.30)

上海にはさまざまな見どころがあり、それは今も増え続けている。ディエンツファン田子坊もまた、最近盛り上がりを見せている地域の一つである。石庫門建築に囲まれた狭い路地に、ごちゃごちゃと土産物屋が並んでいて、奇抜な色の飲み物やアイスクリーム、文革期のスローガンをもじったことばが付いた雑貨、上海の観光地を意匠にあしらったバッグやTシャツなど、キッチュな品々を手に入れることができる。現代のアーティストたちも多く出店していて、賀友直のショップは、その一角を占めている。

ここを訪れるのは、もう五回目だ。正確には、2011年の夏、賀友直ショップがまだ新天地にあった頃にも、この店じたいへは、訪れている。新天地からいっとき、浦東の高層ビルの中に移ったとも聞いたが、2012年の夏には、もうこの田子坊にあった。ここでは賀友直の画集や原画をはじめ、彼の



賀友直ショップ正面

絵がデザインされた壁掛けや玩具を手に入れることができる。新商品はそう出ないようだが、上海を訪れた時には必ず立ち寄るようにしている。

ただしこの店、商売っ気には極めて乏しい。筆者の服装がだらしないせいもあるだろうが、いつも行っても、大した会話もしないまま、画集や小物を二つ三つ買うだけだった。2015年の夏に行ったとき、店のオ



賀友直の絵を意匠にした玩具

バさんに、賀友直のことを日本で広めたいから、図版を原稿に使ってもいいかと尋ねたことがあったが、「あなたに広めてもらわなくても、彼はもう十分有名だし、歳も90を越えているし、むしろ静かな生活を望んでいる」と、けんもほろろに返された。たぶんアヤシイ人に見えたんだろう。

だが、2016年の夏に訪れたときは、少しようすが違っていた。店のおばさんに「何回か来てるんだけど、覚えてる？」と聞くと、彼女は「なんとなくわかる」ようなことを言って、初めての笑顔を見せた。そしてそっとささやいた。「いま二階に経営者がいるわよ」。

この店のラオバンが賀友直の娘さんであることは、何かで聞いていたのだが、こんな有名な場所に店をドンと構えるあたりで、こちらは勝手に、やり手で金持ちの、性格のキツイ、上海人のオバさんをイメージしていた。でも、せっかくだからと思い、会いたいと言った。おばさんはラオバンを呼びに、二階に上がった。

ラオバンである賀小珉女史は、目元がお父さまによく似ていた。筆者の姿を見ると、こちらの予想に反して、穏やかに、遠方からの客人を気づかうあいさつのことばを述べた。こちらは娘さんにお会いしたことで、少し賀友直に近づけたような気持ちになって、浮かれて少し早口に、彼の絵が好きだということ、3月のことを残念に思っていること、そして昨日、寧波の芸術館で賀恵忠氏と会ってきたことなどを伝えた。

賀恵忠氏の名前を出したからかもしれない。彼女は客人の怪しさなど、一切、気に留めるようすもなく、極めて自然に、父親の最期を語ってくれた。直前までとても元気だったこと、お酒が好きだったこと。彼女は話しながら、ふとスマホを取り出すと、在りし日の賀友直の、写真や動画を見せてくれた。そこには娘を前にした、父親である賀友直の姿があった。店の中には、今年新たに増えた商品があって、それは賀友直の自画像のついた湯呑みなのだが、彼女はそれを手に取ると、これは彼の愛用の品と同じ形の物だと教えてくれた。

賀小珉女史の語り方、そして写真や動画の見せ方は、きわめてプライベートな内容であるにも関わらず、あまりに自然だった。そして湯呑みの形も、それほど特別なものには見えなかった。だからこちらも、はじめこそ「賀友直という偉大な絵師の娘さんと話をしている」などと興奮もしたが、終わる頃には、たんに、古い友人の家で起こった日々の話を聞いているような気持ちになっていた。

新しい湯呑みは、もともと、彼の死後、生前近しかった人に配るために作られたものだそうだ。筆者にその資格があるわけもないが、少しでも近づけるかと思い、二つ買った。湯呑みを入れる箱は、堅くて頑丈でかさばったが、その飾らない感じがうれしかった。筆者が北海道に住んでいることを知ると、賀小珉女史は「北海道はいつの時期がいいかしら」と旅行に行きたい旨を述べた。お互い連絡先を交換し、遠くない再会を約束した。



賀友直の湯呑み

これからの賀友直

賀友直を日本人にわかりやすく喩えたとしたら、誰にあたろうか。手塚治虫でもないし、水木しげるでもない。圧倒的な才能とそれを発揮するための幸運、活動期間の長さや生涯に残した作品の多さ、そういったことで言うのなら、この二人が近いようでもあるが、なんだかちょっと違うようだ。そのあたり、中国の連環画家と日本のマンガ家との、それぞれの国における地位のようなものが、根本的に違っていることが関係しているように思われる。

連環画は、今ではコレクターや好事家の趣味の道具となっている感があるものの、本誌第1号以来、たびたび言及されるように、新中国の、とくに初期においては、大衆に極めて身近なメディアとして重要視されていたものであった。賀友直はそのメディアを担うおびただしい数の人々の、トップ数人に昇りつめた絵師であり、おそらくはそのことに対する“敬意”が、中華芸術宮における回顧展のものものしさにつながっている。

しかし賀友直の存在は、いまに生きる人々のアタマの中には、ほとんどないようでもあり、どうやら国の認知と一般の認知との間には、少なからぬ開きがあるらしい。回顧展はとて^すも空いていたし、寧波のホテルや道で、彼を知る人には出会わなかった。田子坊のショップで、自分以外の客を見かけたことも、ほとんどない。まるでみんなドライに、賀友直など、なにも大したことはない^すと見なしているかのようだ。

そんな賀友直だが、目下、作品集の編集が進められていると聞く。その長い生涯の間には、細かな仕事も多かっただろうが、国を代表する連環画家だから、気合いの入ったものになるに違いない。寧波の美術館や上海の田子坊が、今後どのようになって行くのかも楽しみだ。彼の名は、たとえ一般の人には忘れ去られていったとしても、もう揺らぐことのない存在として、連環画ひいては中国美術の歴史の中では、永遠に記され続けることだろう。

あるいはこの先、賀友直は、「ただの」偉大な絵師としてのみ語られる日が来るかもしれない。しかし、彼が生涯、庶民や子どもといった「小さきもの」のそばで、それらを真摯に描き続けた絵師であったことだけは、忘れられてはならない。2016年という年に、おりよく上海と寧波をめぐり、その思いを新たにできたことは、筆者にとっての幸運であった。



『賀友直画三百六十行』より
「画小書」（連環画を描く）

主要参考文献

王彦・徐維欣「從底層而來，帶着大觀而走」（『文匯報』2016.3.17）

『賀友直画自己』（上海書店出版社、1997）

『賀友直画三百六十行』（上海人民美術出版社、2004）

『雜碎集——賀友直的另一條藝術軌跡』（全3冊、上海人民出版社、2006）

『走街穿巷憶旧時』（上海人民美術出版社、2013）

『上海美術館館藏賀友直連環画作品集』（上海人民美術出版社、2015）

* 本稿は、科学研究費（16K02579）の助成を受けたものである。